

日本における西洋モダニズム建築の受容過程 —「アドルフ・ロース」をとりまく一断面—

アドルフ・ロース	建築メディア	日本近代
森口多里	蔵田周忠	川喜田煉七郎

0 はじめに

0-1 背景
西洋における諸建築運動が、どのように日本に波及し影響を及ぼすのか、その過程を明らかにしたい。その一端としてアドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) をとりあげる。日本におけるロースのイメージは、伊藤哲夫氏の訳書『装飾と罪悪』^{※1} に依るところが大きい。しかし、その標題ともなっている主論文「装飾と罪悪」^{※2} に関しては、中村敏男氏による邦訳が1967年発行の雑誌『SD』^{※3} にすでに掲載されている。また1971年に長尾重武氏が、海外でなされた主要な研究をとりあげ、ロース研究の現状と課題をまとめている^{※4}。これら1970年前後を境に日本におけるロース研究が活発化する^{※5}。一方、大正末期より様々な国内文献にロースに関する記述が散見され、ロースの認知は、1970年を待たずとも早い段階に行なわれていたと考えられる。ただ、戦前日本においてロースがどのように理解されていたのかという点については未だ全く不明瞭である。

0-2 目的
ロースがこれまでどのような紹介され、評価されてきたのか、彼を扱った戦前日本の文献を収集・整理することにより明らかにする。ロースに関する記述を網羅的に抽出し、知見を得ようとすることは、ロースがどうであったかという事実の単純な羅列でなく、その時代の建築に対する需要と供給、またそのメカニズムを映しだすと考える。本研究は、バラバラな状態にあるテキストを頼りに、その背後に潜む構造をも捉えようとするものである。以下の3点を研究の主題として設定する。

- 日本の建築界のロースに関する記述はいつ・だれが・どのように書いてきたのか（1章）
- 日本で記されたロースに関する情報の所在はどこにあるのか（2章）
- 「ロース」をとりまく大正末期から昭和戦前における日本の建築思潮および建築ジャーナリズムの様相の一端はいかなるものか（3・4章）

0-3 方法^{※6}
戦前期の主な建築雑誌、『建築雑誌』『建築世界』『建築評論』『建築新潮（前:新住宅）』『建築時潮』『建築紀元』『国際建築（前:国際建築時論）』『現代建築』『インターナショナル建築』『建築工芸アイシーオール』『新建築』を中心に通覧を行なった。網羅的に閲覧することを第一義としたが、ある程度の記事が集まると派生して別の記事の存在も見えてくるようになり、それについては適宜参照しながら効率的な収集に努めた。また雑誌に限らず、刊行書籍など可能なものにはできる限り目を通した。そして、これらの文献からロースに関する記述や図版を抽出し分析を進めた。もちろん見落としもあるだろうが、資料の扱いは以上の方法をとった。

2012年度建築史研究室修士論文発表会

1 戦前日本の文献上に記された「アドルフ・ロース」

1-1 関連記事の抽出とその時系列的分布
これまでの収集の結果、33件の記事（雑誌27件・書籍6件）が見つかった。それら記事数の時系列的な分布は以下のようになる（表1）。この分布に見られるように、1930年を境に記事数が増加し、1931年に一年間の掲載記事数がピークを迎える。記事が増加するこの1930年をひとつの区切りと考え、それ以前（第Ⅰ期）と以後（第Ⅱ期）におけるロース紹介の様相を時系列に従い整理した。

1-2 第Ⅰ期（1924-1929）：4件
ロースの名を最初に掲載した文献は、今回調べ得た限りでは、洪洋社発行の『建築新潮』1924年8月号である。美術評論家の森口多里（1892-1984）による全5頁におよぶロース記事が掲載された（3-1に詳述）。その他、上野伊三郎（1892-1972）はウィーンの郊外住宅について、ロースらウィーン市住宅局の活動に触れ^{※7}、岸田日出刀（1899-1966）は表現主義的建築精神に代わる「科學的精神又は工業的精神」の代表としてコルビュジエやバウハウス、そして「ルース」をとりあげており^{※8}、これは初めてロースを西洋の建築界の動向の中に位置づけた記述であった。ただ、この時期は「ルース」「ロオス」などと表記が揺れ、ロースの名はまだ定着していない。

1-3 第Ⅱ期（1930-1939）：29件
30年代に記事が増加した要因の一つとして、ロースの還暦に際し1931年に発行された弟子のクルカ（Heinrich Kulka,1900-1971）による初の作品集^{※9}の存在があげられる。『建築時潮』（構成社書房）をはじめ各誌が即時的にその発刊を伝えた^{※10}。一方で、ロースの理論や作品に対する言及もみられ、それらを扱ったのは川喜田煉七郎（1902-75）と蔵田周忠（1895-1966）であった。そこでは主に（1）コルビュジエに先立つ先駆的存在（2）ヴァグナー派との関連（3）ウィーン市住宅局での功績、といった観点を中心にロースはとりあげられ、断片的な情報ではあるが、基本的に肯定的な評価を示すものであった^{※11}。また、ロースの代名詞ともいえる「ラウムプラン」への言及はみられず、ロースの空間に対する記述は、蔵田による室内の材料の用法への関心にとどまった。さらに「装飾と罪悪」についてもその内容にほとんど触れられることはなかった。

表1	戦前のロース関連記事33件の時系列分布（筆者作成）
10	←----- 第Ⅰ期 ----->>----- 第Ⅱ期 ----->>
9	←----- (4件) ----->>----- (29件) ----->>
8	-----
7	-----
6	-----
5	-----
4	-----
3	-----
2	-----
1	-----
0	-----
	1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945

2013. 2. 5.

2 ロースに関する情報の所在

ここでは、収集した記事がいかなる情報をもとにして成立し得たのかという点を問題にする。ロースの作品を実見し評したものなのか、あるいは書籍を通した間接的なものであるのか、こうした情報の経路をつぶさに観察することは、西洋モダニズム建築受容のある一断面を浮かび上がらせると考える。

2-1 移入を担う海外文献
各記事について情報の所在を検証した結果、ロースに関する情報は海外文献、それらごく限られたものに依拠していることが判った（表2）。

表2	主なロース関連記事とその情報の所在（筆者作成）					
1923	L'Architecture vivante	パリ	1924	森口多里	一社会主義的建築家の思想と作品	建築新潮
1926	Der modern Zweckbau (A.Behne)	ベルリン	1927	岸田日出刀	歐米建築界の趨勢	建築年鑑
			1930	川喜田 仲田	現代の目的建築（3）	建築新潮
				上野伊三郎	ドイツ及オーストリアに於けるイターナショナル建築	イターナショナル建築
			1931	蔵田周忠	フーゴフ・ヘーリング	国際建築
				川喜田煉七郎	新興建築史 No.1	アイシーオール
			1932	川喜田煉七郎	近代建築史 No.1	アイシーオール
			1935	蔵田周忠	『現代建築』	—
1930	Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz)	ベルリン	1931	蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
			1932	川喜田煉七郎	近代建築史 No.1	アイシーオール
			1933	蔵田周忠	プルノオ・タウト	国際建築
			1934	川喜田煉七郎	近代建築史 No.4	アイシーオール
				蔵田周忠	『現代建築』	—
			1935	川喜田煉七郎	チェコスロヴァキヤ共和国	アイシーオール
1931	Das neue Frankfurt	フランクフルト	1931	(山越邦彦)	アドルフ・ルース	建築時潮
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
			1932	板垣藤穂	『藝術界の基調と時潮』	—
1931	WasmuthsMonatshefte für Baukunst	ベルリン	1931	眞柄藤三	アドルフ、ルース	イターナショナル建築
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
1929	Modern Architecture (H.R.Hitchcock)	ニューヨーク	川喜田煉七郎	新興建築史抄No.4	イターナショナル建築	
			1933	川喜田煉七郎	新興建築史抄No.5	国際建築
1931	Adolf Loos: Das Werk des Architekten (H.Kulka)	ウィーン		(山越邦彦)	アドルフ・ルース	建築時潮
				(蔵田周忠)	アドルフ・ロース	国際建築
			1931	眞柄藤三	アドルフ、ルース	イターナショナル建築
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
				蔵田周忠	『現代建築』	—

2-2 その特質
まず、ロースにまわる記事を成立させた主たる文献としてA. ベーネ（Adolf Behne,1885-1948）とA. プラッツ（Adolf Platz,1882-1947）による著書があげられる。両書はともに1920年代までの西洋建築界の動向を体系的に記したものである。そのなかで、前者はヴァグナー派に触れたあと「当時ウィーンにあったアドルフ・ロースは急進的で勇敢な建築家で…」^{※12}とし、後者は「コルビュジエの思想は既に30年前ウィーンにてロースにより種々な形式の上に語られていた…」^{※13}とする。両書は当時日本でも広く読まれ^{※14}、特に先の岸田は1926年の渡航の際にプラッツの著書を手にしており、それによってロースの位置づけを成し得たと考えられる。ここで注目されるのは、ロースが活動したウィーンで刊行された文献で戦前日本のロース観に影響を与えたものは、唯一先の商品集のみであり、ロースに関する情報はドイツを経由し、西洋の土壌で既に編集された情報として移入されていた。

3 執筆の経緯とロースへの認識

ここでは特に、第Ⅰ期から森口多里、第Ⅱ期から川喜田煉七郎と蔵田周忠をとりあげる。彼らはいかにしてロースを知り、ロースについて書いたのか、そのプロセスの復元をおこなった。

3-1 森口多里によるロースの紹介
3-1-1 パリ留学にて
森口は先の『建築新潮』（1924年8月）の記事において、ロースが出現するに至るまでのオーストリアの建築界の趨勢を略説したうえで、ロースの論考「建築について (Architektur)」^{※15}の部分邦訳を掲載し、ロースの建築論に対し自身の見解を示した。「佛蘭西の最近の一建築雑誌」との記述とその内容から、森口が仏誌『L'Architecture vivante』を底本としたことが明らかとなった。森口は震災後の1923年11月に「装飾研究」という名目^{※16}で日本を発ち、翌年1月4日にパリに辿り着く。末尾の記述から執筆は5月17日であるから、雑誌の入手から「巴里通信」執筆まで、長くとも5月ほどであった。

3-1-2 「建築非芸術論」
そのなかで「建築の近代的様式を生むものは個性を没却した傳統であるといふ（ロースの）考へは當然建築非藝術論に導かれなければなりません」^{※17}と述べ、野田俊彦（1891-1932）による「建築非芸術論」（1915）^{※18}との類似性を指摘した。ロースの「建築について」と照合すると、建築の芸術性を認めながらも、実用的建築、つまり人が住まう建築において建築家の個性が介在することを拒む態度が両者に共通する。「建築非芸術論」をロースの理論に結びつけようとする研究はこれまでも見られるが^{※19}、森口は1924年の時点で芸術の「否定的肯定」という点を見抜いていた。

3-2 川喜田煉七郎による「近代建築史」
3-2-1 ロースへの無関心―戦後への影響
川喜田は1930年以降たびたびロースに言及し、当時最も多い8件に及ぶ。ただし、それらは西洋近代建築史的性格を持つプラッツ、ベーネ、ヒッチコックの著作を底本とした翻訳記事におけるものであり^{※20}、いずれもロース単体を扱ったものではない。また、プラッツの著書内の「建築家索引」をもとにした連載「歐米建築家列傳」（『建築世界』,1929.8-1931.5）では、ロースをそのセレクションから外しており、ロース単体に対する特別な関心は見られない。しかし「装飾と罪悪」を初めて邦訳紹介した中村敏男氏はロースの重要性を認識させられた文献として上記3文献に加え川喜田による訳述を挙げ^{※21}、さらに戦後最初期にロースを扱った『近代建築史図集』（日本建築学会編,1954）がプラッツの著書に多くを負っている点など^{※22}、他のロース記事に比してその影響力は極めて大きいことが明らかとなった。

3-2-2 堀口捨己と仲田定之助

川喜田は自ら編集を務めた『建築工芸アイシーオール』^{※23}を中心に精力的な翻訳活動を展開した。その背景には、1927年に行われた分離派建築界第6回公募展への参加、そこで堀口捨己（1895-1984）と、さらに分離派の会合を介して日本人で初めてバウハウスを訪れた仲田定之助



fig.1 森口多里「巴里通信」（1924.8.『建築新潮』p.13）

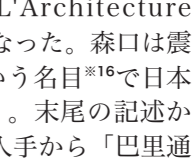


fig.2 『建築工芸アイシーオール』（1931.11.新興建築史）

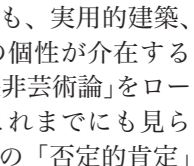
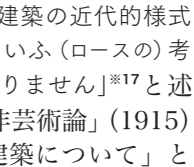


fig.2 『建築工芸アイシーオール』（1931.11.新興建築史）

(1888-1970) と接点を持ったことがあげられる。ブラッツの邦訳版『近代建築史』の序文で「虎の巻をかくして物を云う態度も気に入りませんので」^{※24}と記していることから明らかのように、あらゆる派閥からも外れていた川喜田は、堀口・仲田らのドイツを中心とする豊富な蔵書を知識的基盤とし日本にいながらにして国際的視野のもと海外動向の紹介に尽力した。

3-3 蔵田周忠による総体的な言及

3-3-1ドイツを中心とした渡航
蔵田も同様に継続的にロースを扱った。特筆すべきは日本初のロース特集号、1931年4月発行の『国際建築』であり、そこでは複数の文献を参照しながら、総合的に分析を加えた。この背景には、同誌の編集長である小山正和 (1892-1970) の命で、1930年3月から海外特派員としてドイツを中心とする最新の情報を即時的に日本に伝える役目を担ったことがあげられる。第2章において、蔵田が複数の文献を用いていたことを示したが、記事を執筆し得た背景にはこの様な事情があった。また、実際に蔵田は、前述の3著作およびロースの作品集を全て所有していた^{※25}。

3-3-3 3つの体系的論考
一方で蔵田には西洋建築の動向を著した3つの体系的な論考がある。渡航後の1935年以降に書かれた『現代建築』（東学社,1935）、『近代建築史』（相模書房,1965）においてはロースを「後進コルビュジェの前駆」としてとりあげているが、それ以前に書かれ、日本における最初期の近代建築の通史とされる『近代建築思潮』（洪洋社,1924）においては扱われていない。ここにもベーネ、ブラッツの著作による影響がうかがえた。

4 考察 ― 「アドルフ・ロース」と日本の建築界

本研究は記事を成立させた背景に目を向け、逆照射的に日本の西洋受容の一端をみようとするものである。なぜその時代にロースに関する記事が書かれたか、少し視点を広げ、その要因を日本建築界の動向と照合しつつ考察する。

4-1 建築は芸術か

まず、森口が執筆した1924年当時はいかなる時代であったのか。野田の論文が発表されたのち、佐野利器 (1880-1956) を中心とする「構造派」が建築界の主流派となる。市街地建築物法の制定 (1919) などの外的要因にも促進され、構造学が体系的に優越を示すことになった。そんな中、1920年に東京帝国大学建築学科の卒業を控えた6名が「分離派建築会」を結成し、「過去圏より分離」することを掲げる^{※26}。彼らは同じイデオロギーを必ずしももってはいなかったが、建築を芸術とみなす姿勢は根底的に一致していた^{※27}。同じアカデミーにおいて佐野利器らが工学を重視するなか、彼らはいわばアカデミー内部からの反逆であった。そしてそれまで個人的、散発的でしかなかった建築思潮を一つの運動体として標榜し、ドイツ表現主義に根ざしながら様々に活動を繰り広げた。そのような分離派の活動に対し、後に谷口吉郎 (1904-1979) は「分離派批判」(1928) と題し、彼らの建築を美的観点から捉え

る「耽美主義」的な態度をこきおろした^{※28}。

一方で、森口はロースを紹介した記事で、日本の芸術に携わる者に対して、次のように投げかける。「此のオーストリアの一建築家だけは敢然として其の思想と創作との全部を擧げて社會主義的傾向に導いてゐるのです。彼（ロース）の言葉は凡ての方面に於て混亂の感ぜられるところの日本の現代の社會に生きる建築家諸君にとつて、決して他山の石ではないであらうと思ひます」^{※29}
個人主義でなく、社会主義を良しとする態度。ここでいう「社会主義」について、森口は「個性本位の反對の社會本位の境地を意味する」とする。先に述べた日本の状況を鑑みると、森口がそのタイトルにおいて「社会主義建築家」として、かつてウィーンで同様に闘ったロースの存在を日本に伝え、「個人主義的な創作の功名心」への警告を示そうとした企図が見える。そしてここでは、森口の「西洋文化と日本文化の間に立つて両者を等間隔に置いて見つめることのできるまなざし」^{※30}が如実にあられる。西洋と日本を股にかけ、さらに建築外の美術評論家としてなお客観的にロースを介して日本の建築界に是非を問う姿勢がみえた。

4-2 分離派からバウハウスへ

蔵田は、20年代初頭に分離派建築界の活動に参画するも、いち早くその表現主義的芸術観の解体を迫った。その拠り所はバウハウスの理念であり、分離派を介して接点をもった川喜田・仲田らを支援者として1928年に「型而工房」を設立した。一方で川喜田も、バウハウス留学から帰国した水谷武彦 (1898-1969) らと1931年に「生活構成研究所」を組織し、その賛助メンバーには仲田のほか、ロースを著作にて扱った板垣鷹穂 (1894-1966) の名がある。さらにその翌年、蔵田と川喜田は土浦亀城 (1897-1996) や市浦健 (1904-1981) らと「日本トロッケンバウ研究会」を結成し、バウハウス主導者であるグロピウスが試作研究を進めていた乾式構造家屋の定着を目指した^{※31}。蔵田と川喜田の両者には、アカデミズムへの反骨精神が通底し、20年代には分離派に近接しながらも、その後はバウハウスの理念を拠り所としその普及に努めた。日本における西洋モダニズム建築運動の受容過程を、ロースを題材として見たことで、建築メディアと密に結びつき啓蒙と実践とを展開させながら、世界的な潮流に日本の建築界を乗せようと企図した一団の活動を浮かび上がらせることができた。

結論

戦前期を対象とし、ロースに関していつ・だれが・どのように書いてきたのかを明らかにした。また、それらが極めて限られた文献を介した情報であること、さらに森口、川喜田、蔵田といった主な執筆者のロースを扱う経緯と企図を明らかにした。それらを通し、戦前日本の建築思潮および建築ジャーナリズムの一断面を捉えることができた。

註

1 伊藤哲夫訳、装飾と罪悪：建築・文化論集、中央公論美術出版、1987。
2 1908年に行われた講演内容に基づく。テキストとしての初出は仏誌[Cahiers d' aujourd' hui](1913.6)とされる。『Trotzdem』(1931)所収。
3 SD 特集ウィーン―伝統との相克、鹿島研究所出版会、1967.7。
4 長尾重武、ADOLF LOOS研究：1.ADLF LOOSの空間イメージ。大会学術講演梗概集、1971、vol.46。
5 70年前後から現在までにロースに言及した文献は170編に及ぶ。

6 分析方法は、松原弘典『未像の大国 日本の建築メディアにおける中国認識』(2012) および藤岡洋保「大正末期から昭和戦前の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価」(1987)／「大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるヴァルター・グロピウスの評価」(1985)を参照。初紹介はコルビュジェが1923年『建築世界』、グロピウスが1924年石本喜久治『建築普』。
7 上野伊三郎、ウーエンの田園都市―中歐の建築界に就いて（四）、建築と社会、日本建築協会、1926年8月。
8 岸田日出夫、歐米建築界の趨勢、建築年鑑 昭和2年版、建築世界社、1927年8月。
9 H. Kulka “Adolf Loos: Das Werk des Architekten.” (1931)
ロース自身が監修を務めた。日本での邦訳出版は1984年。その他同年には、Adolf Loos “Trotzdem”、Franz Glück “Adolf Loos”、B. Mankalauo “Adolf Loos” などが刊行された。
10 『建築時潮』(1931年2月)の他、『国際建築』(3月)、『インターナショナル建築』(4月)も刊行を伝えた。
11 唯一、川喜田は『新興建築史No.1』(アイシーオール,1931.11)において「彼れはワグネルと違つて孤立してゐたので、その活動を運動を効果的にしなかつた」と否定的な見解を示すが、ベーネの著書がもとになる。

12 Behne Adolf. Der moderne Zweckbau. Drei Masken, 1926.
13 Platz Gustav Adolf. Die Baukunst der neuesten Zeit. Propyläen, 1930.
14 岸田は「ロシアの建築」『学会パンフレット』,1927)において参考文献としてベーネの書籍をあげ、藤岡氏は先の研究で同書が「日本人建築家がル・コルビュジェの建築や思想を理解する助けになった」とする。
15 本記事では「建築の近代的様式」と紹介されている。本論考は『Der Sturm』(1910)を初出とし、『vivante』には『Cahiers d’ aujourd’ hui』(1912)に掲載されたマルセル・レイによる仏訳が転載された。
16 秋山真一、近代知識人の西洋と日本；森口多里の世界、同成社、2007。秋山氏は「留学目的は装飾研究という名目だった。『森口多里論集』の年譜には「ソルボンヌ大学の聴講生となる」とある。ところが、大学で何を学んだのかについてはほとんど森口は語ってくれてはいない。」とする。
17 森口多里、一社会主義的建築家の思想と作品―巴里通信、建築新潮、洪洋社、1924年8月、5巻8号、p.15。
18 野田俊彦、建築非藝術論、建築雑誌、1915、vol.29、no.346。
もとは卒業論文「鉄筋混成土と建築様式」の一部。
19 長谷川克己、建築の現在、鹿島出版会、1975、pp.26-27
では「アドルフ・ロースのあの有名な「装飾と罪」の論文につながるのかもかもしれないと私はひそかに推理している」とされ、岡山理香氏は「野田は、アドルフ・ロースの『装飾と犯罪』を参考にしたのであろうが」としている。（岡山理香、6虚偽論争をめぐる諸問題：その1、研究報告集、計画系、1993、no.63.）また、谷川正己氏は、野田を「日本版オットー・ワグナー」とする。（谷川正己、野田俊彦：日本版オットー・ワグナー：野田俊彦『建築非藝術論』、建築雑誌、1986、vol.101、no.1250。）
20 A.Platz “Die Baukunst der neuesten Zeit” 1927:連載『近代建築史』／A.Behne “Der modern Zweckbau” 1926：連載「現代の目的建築」および連載「新興建築史」／H.Hitchoock “Modern Architecture” 1929:連載「新興建築史料」。

21 中谷研究室ロースゼミ調査「中村敬男氏インタビュー」(2012年9月29日実施)
22 『建築人物群像―追悼編・資料編』(1995)内、佐々木安「川喜田煥七郎」
23 洪洋社より1931年11月に創刊。川喜田が執筆から編集まで独力で行ない、1936年8月に終刊。
24 村松真次郎、日本建築家山脈、鹿島出版会、1965、p.274。
25 東京都市大学「蔵田周忠文庫」にて確認。(2012年10月11日)
26 『分離派建築会の宣言と作品』(岩波書店、1920)石本喜久治、滝沢真弓、堀口捨己、森田慶一、山田守、矢田茂の6名。
27 宮内嘉久、少数派建築論：一編集者の証言、井上書院、1974、p.271。
28 谷口吉郎、分離派批判、建築新潮、1928。
29 前掲 森口の記事、p.17「混亂」とする背景には関東大震災(1923)や主観的芸術運動の限界を脱し得ないままマヴォ、メテオール、ラトー等が相次いで結成された状況があらう。
30 前掲『近代知識人の西洋と日本』。秋山氏は森口の生涯を描く上で、「本書では、西洋文化と日本文化の間に立つて両者を等間隔に置いて見つめることのできるまなざしを森口がどのように獲得し得たのか問題にする。」と主題を設定している。
31 山野 てるひ、造形主義美術教育の承譜 1：川喜田煥七郎の「構成教育」に関する一考察、美術教育学：美術科教育学会誌、1993、no. 14、pp. 345-362。

表3 アドルフ・ロース関連書籍・雑誌記事一覧（戦前～戦後初期）

年	月	執筆者	題名	掲載媒体	発行	紹介作品	紹介論考	情報の所在	
戦前第一期	1924	8	森口多里	一社会主義的建築家の思想と作品 ― 巴里通信	『建築新潮』5巻8号	洪洋社	モイジィ邸家 (Lido,1923)	建築について (1910)	L'Architecture vivante (Paris, 1923)
	1925	3	ム・アマールト 訳者不明	装飾と建築	『建築新潮』6巻3号	洪洋社	―	(戯画への解説)Loos von Ornament)	未特定
	1926	8	上野伊三郎	ウーエンの田園都市 ― 中歐の建築界に就いて (四)	『建築と社会』9巻8号	日本建築協会	市住宅局時代 (20年代) の作	―	1922-25年ドイツ・ウィーン留学 (ホフマンの事務所に勤務)
	1927	8	岸田日出夫	欧米建築界の趨勢	『建築年鑑』昭和2年版	建築世界社	―	―	1926-27年欧州視察 Der moderne Zweckbau (A.Behne, 1926)

1930	4	川喜田煥七郎 仲田定之助 訳 Aベーネ (山越邦彦)	現代の目的建築 (3) (“Der moderne Zweckbau” 1926.)	『建築新潮』11巻4号	洪洋社	前掲設計 (1930)、カフェムゼウム (1899)、ロスハウス (1910)、シュタイナー部 (1910) ほか	建築について (1910) (Von der Sparsamkeit)	Der moderne Zweckbau (A.Behne, 1926)	
								[L'Architecture vivante (1923)] stein holz eisen (Nr.13, 1930)あるいはDie Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930)	
	10		チェコスロヴァキアの新建築	『建築時潮』4号	構成社書房	―	―	―	
			コルビュジェ 前川國男 訳	『今日の装飾藝術』	現代建築文庫第5編	構成社書房	―	『装飾と犯罪』	L'art decoratif d'aujourd'hui (Paris, 1925)
1931	2	(山越邦彦)	アドルフ ルース	『建築時潮』8号	構成社書房	カフェムゼウム (1899) ホテル・パビリオン (1923)	Ins Leere Gesprochen (1921) Trotzdem (1931)	Adolf Loos (H.Kulka, 1931) Das neue Frankfurt (1930.1) Frankfurt Zeitung (1929.3.21) ― Adolf Loos (H.Kulka, 1931) ― Adolf Loos (H.Kulka, 1931) Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930) Wasmuths Monatshefte der Baukunst (Willy Haas, 1931) 森口多里『建築新潮』 (1924.6)	
	3	蔵田周忠	4「アドルフ・ロース」―Adolf Loos―	『国際建築』7巻3号	国際建築協会	―	―	―	
	4	蔵田周忠	アドルフ・ロース	『国際建築』7巻4号	国際建築協会	カフェムゼウム (1899)、ヴィラ・カルマ (1904)、ロスハウス (1910)、テラス型集合住宅家 (Paris,1923)、モイジィ邸家 (Lido, 1923)、シカゴトリビュン家 (1923)、ホテル・パビリオン (1923) 図録に4作と「ロス肖像と書翰」	Ins Leere Gesprochen (1921) Trotzdem (1931)	Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930) Wasmuths Monatshefte der Baukunst (Willy Haas, 1931) Das neue Frankfurt (1930.1)	
	6	上野伊三郎	ドイツ及オースタリーに於けるウタ・ナガヲ建築	『ウタ・ナガヲ建築』3巻6号	日本ウタ・ナガヲ建築学会	―	―	―	
1932	7	蔵田周忠	「ドイツ建築博」―週記	『国際建築』7巻7号	国際建築協会	―	―	―	
	10	川喜田周忠	フーゲー・ヘーリンク	『国際建築』7巻10号	国際建築協会	―	―	―	
	11	川喜田煥七郎 Aベーネ	新興建築史 No.1	『ウタ・ナ』1巻1号	洪洋社	―	―	―	
	2	坂垣鷹穂 蔵田周忠	『藝術界の基調と時潮』―一九二一年建造建築博覧会・会場―週記	『藝術界の基調と時潮』	六文館	J・ペカー部 (Paris,1927)	―	―	
1932	7	川喜田煥七郎 Aブラッツ	近代建築史 No.1	『ウタ・ナ』2巻7号	洪洋社	―	―	―	
	5	蔵田周忠	ブルノオ・タウト	『国際建築』9巻5号	国際建築協会	―	―	―	
	8	山田守	ジードルンク	『学会パフレット』5巻11号	日本建築学会	―	―	―	
	10	山田守	嗚呼 adolf loos.	『新建築』9巻10号	新建築社	ヴェルクブント・ジードルンク (Werkbundsiedlung,1930-32)	―	―	―
1933	10	川喜田煥七郎 ヒッチコック	新建築 (新興建築史料No.4)	『建築世界』27巻10号	建築世界社	―	―	『装飾的評論』	Modern Architecture (Hitchcock, 1929)
	11	川喜田煥七郎 編集者	リユルセとマレス・テパン (新興建築史料No.5) レッチコック	『建築世界』27巻11号	建築世界社	『戦前の作品』	―	―	Modern Architecture (Hitchcock, 1929)
	1	川喜田煥七郎 Aブラッツ	新商店舗建築 近代建築史 No.4	『建築世界』27巻11号	建築世界社	衣裳店A.マツネル (1929)	未特定	未特定	Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930) Das neue Frankfurt (1929.2) The Architect & building news (1933.10.13.)
	3	蔵田周忠	アドルフ・ロース作品展	『ウタ・ナ』4巻1号	洪洋社	―	―	―	―
1934	4	川喜田煥七郎	アパートメントハウス	『ウタ・ナ』4巻5号	洪洋社	テラス型集合住宅家 (Paris, 1923)	―	―	―
	9	Aロース 訳者不明	戦作り (「主筆」欄)	『建築世界』28巻9号	建築世界社	―	―	馬貝職人 (1903) [Trotzdem (1931)] (初出はDas Andere)	―
	12	ワグロピウス 蔵田周忠 本多修 訳	現代建築及び計劃に於ける形式と技術の諸問題	『国際建築』10巻12号	国際建築協会	ロスハウス (1910)	―	―	The Architect & building news (1934.5.18.)
	5	蔵田周忠	『現代建築』後編	『實用建築講座』	東洋社	シュタイナー部 (1910)	―	―	―
1935	11	川喜田煥七郎	チェコスロロヴァキヤ共和国	『ウタ・ナ』6巻11号	洪洋社	―	―	―	
1937	1	横光利一	厨房日記	『改造』19巻1号	改造社	ツアラ部 (Paris,1926)	―	―	ツアラ部訪問 The Architecture Forum plus (1938.2)
1939	4	Rノイトラ 松村(正倫) 訳	建築のリー・チョナリズム (Regionalism in Architecture)	『国際建築』15巻4号	国際建築協会	―	―	―	

戦後初期	1952	10	J.リチャーズ	『近代建築とは何か』	第5章 思想の生長	彰国社	シュタイナー部 (1910)	―	―	
	1954	8	日本建築学会	『近代建築史図案』	―	彰国社	―	―	Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930)	
	1957	6	N.ペプスナー 白石博三 訳	『モダン・デザインの展開』	―	みすず書房	シュタイナー部 (1910)	Ins Leere Gesprochen (1921)	―	Pioneers of modern design (N.Pevsner, 1949)
		8	星野啓	13. ADOLF LOOS	建築学会研究報告 38号	日本建築学会	―	―	―	Adolf Loos (H.Kulka, 1931)
		9	蔵田周忠	日本近代建築の研究 ―国際環境における日本近代建築の史的考察	早稲田大学学位論文	早稲田大学	ロスハウス (1910)	―	―	Der moderne Zweckbau (A.Behne, 1926) Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930)
	1959	3	蔵田周忠	近代建築史 ―国際環境における日本近代建築の史的考察	『近代建築史』	相模書房	ロスハウス (1910) モイジィ邸家 (Lido,1923)	―	―	Der moderne Zweckbau (A.Behne, 1926) Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz, 1930)
	1965	7	Aロース 中村敏男 訳	『装飾と罪悪』	『SD』32号	鹿島出版会	―	―	―	川喜田の3つの訳述『新興建築史』:近代建築史・新興建築史料』からロースを重要視
	1970	8	Aロース 阿部公正 訳	『装飾と罪悪』	『世界建築宣言文集』	彰国社	―	―	―	Programme und... (U.Conrads,1964)
	1971	9	長尾重武	ADOLF LOOS研究 (1.ADLF LOOSの空間イメージ)	学術講演梗概集 46号	日本建築学会	シュタイナー部 (1910)	―	―	Pioneers of the modern movement (N.Pevsner, 1936) Theory and design in the first machine age (R.Banham, 1962)

凡例

太字は今回とりあげた主な執筆者である森口・川喜田・蔵田およびロースによる記事。

「紹介作品」欄、特記無き限り作品の所在はウィーン。

「紹介作品」および「紹介論考」欄、灰字は図版や解説のないもの。

また、【―】表記は推察によるもの。



fig.3『国際建築』表紙 (1931.4、ロース特集)

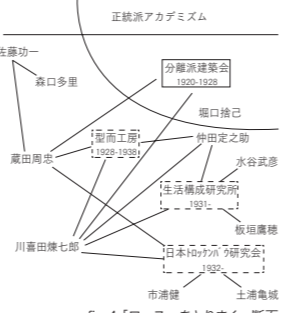


fig.4「ロース」をとりまく一断面 (筆者作成)